

小林久三 社命誘拐

角川書店

社命誘拐

小林久三



昭和五十三年十一月二十五日 初版発行

発行者 角川春樹

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二丁目十三
番一〇三(二六五)七一一一大代表
〈振込〉東京三一九五二〇八(郵便)一〇二

新興印刷・鈴木製本

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872230-0946(0)

〈目次〉

第一章	誘拐辞令	五
第二章	偽計辞令	壹
第三章	殺人辞令	三七
第四章	逃走辞令	一七
第五章	退職辞令	二五
あとがき		三三

装
丁
辰
巳
四
郎

社命誘拐

第一章 誘拐辞令

1

「誘拐？」

西沢は驚いて、荒堀部長の顔をみつめた。

「社長の娘を誘拐しろ、というんですか」

「そういうことだ」

荒堀部長の顔に、からかうような微笑が浮んだ。西沢は憤然としていった。

「冗談はよしてください」

「本気だよ、私は」

「え？」

「社命だ。素直に命令をきいて欲しい」

「分りませんね、部長の仰有ることが」

「そうだろうか」

「どういふことですか」

「何度もうのように、社長の娘を誘拐して欲しい」

「ぼくがですか」

ああ、と荒堀が真顔でうなずいた。

「お断わりします」

「社をやめる気かね、君は」

「脅迫ですか、今度は」

「折角、一月前に室長に昇進したばかりだ。君の前途は洋々としている。いま社をやめる手はないだろう」

荒堀部長が、乾いた笑い声をたてた。どこか、かすれたような笑い声だった。

「しかし——」

と、西沢は部長のデスクににじり寄ると、正面から荒堀の顔をみつめた。窓から射し込む光が、痩せた荒堀の顔に淡い陰翳を作っている。狭い額。眼鏡の奥の窪んだ目。やや薄目の唇。そして尖った、細い顎。

西沢にみつめられて、荒堀は体の向きを変えた。荒堀の腰の下椅子が、軽く軋んだ。

「しかし、部長」

西沢は、横を向いた荒堀の顔から目を離さずにいった。

「いきなり社長の娘を誘拐しろといわれても——」

「できなかね」

「応じられるわけがないでしょう」

「ろくに話をきかないで断わるのか」

「無茶な命令過ぎませんか」

「無茶、か」

部長はかすかに唇を曲げて笑った。今度は、笑い声をあげなかった。

「お断わりするしかありません」

「なるほど」

荒堀は体を起して、すくいあげるように西沢を見返した。眼鏡の奥の目が、酷薄な光を帯びて細くなった。

その目に気圧されて、西沢は一瞬、目を伏せた。

胸にかすかな不安が湧いた。この十年間、宣伝部にいて、部長の人柄や性格はつかんでいるつもりである。小心翼翼とした男で、部下に冗談をいうようなタイプではない。つねに自己の保身に汲々として、

「会社のために頑張ってくれ」

と口癖のようにいい、部下を督励している。

臆病で、偏狭だが、仕事ぶりはきちんとしている。その点を買われて、定年を二年後に控えた去年の春、宣伝部長の椅子に着いたのだらう。上司の命令には唯々諾々と従い、逆に部下に接する態度は厳しい。人望はまったくないが、重役連中の信頼はすこぶる厚い。

宣伝部企画室に籍をおく西沢は、そんな部長に反撥し、内心、軽蔑してきた。部下にとって、もっとも仕えにくい型の上司だった。

荒堀は敏感に、西沢の心にあるものを感じ取っていたらしい。ことあるごとに西沢にいやがらせをしてきた。書類一枚、ハンの擦し方ひとつにも、ケチをつけるのである。御殿女中のような、陰湿ないやがらせに腹をすえかねて、直接、荒堀に噛みついたことがある。

激しいやりとりになり、狼狽した当時の企画室長がとめに入らなかつたら、彼は荒堀を殴り倒して

いたかもしれない。

部内の連中は、西沢の態度に、心中、快哉を叫んだにちがいないが、彼への共感を態度でしめそうとするものは、だれひとりいなかった。

次の日、西沢は懷に辞表を呑んで出社した。

荒堀のデスクに辞表を叩きつけるつもりでいたのである。荒堀の態度いかんでは、本気で殴り倒すつもりでいた。

だが、意外なことが起った。

出社するとすぐに、西沢は宣伝担当重役の村木重信に呼び出され、重役室で村木に企画室長昇進の内示を受けたのである。

専務の村木は、昨日の「事件」に一言も触れようとはせず、

「前から君に目をつけていたのだ」

といい、

「どうだ、ぼくの意向を受けてくれるね。むろん、人事担当重役とは話がすんでいる」

そうつけ加えた。

専務の唐突な申出に、西沢は戸惑った。

戸惑って返事を洩る西沢に、村木は最後に、とどめを刺すように、

「宣伝企画室には、君のような気骨のある男が必要だ。明日までに、イエスの返事をくれんか」

否応もなかった。

別に宣伝企画室長の椅子が欲しかったわけではない。だが、洋酒業界における東和醸造の市場占有率は、年々、落ちている。業界の老舗にあぐらをかいた商法が、地盤沈下を招いた最大の理由だが、それ

は宣伝の面にもはっきり現われていた。同業の他社にくらべて、宣伝方法の感覺的な古めかしさは、救いがなかった。伝統にのみしがみついただけで、十年一日のごとくにくり返される旧態依然とした宣伝方法に反撥した西沢は、何度も、宣伝方法の抜本的な改革を提案してきたが、そのたびにつねに握りつぶされてきた。

それだけに、宣伝企画室長の椅子は魅力があった。少なくとも、単なる室員よりも発言力を増すだろう。

へ一度、やれるところまでやってみるか

そう考えて、西沢は村木の内示を受け入れようと意を決した。部長の荒堀とソリが合わないのは覚悟のうえだった。全力をつくして、自分のやり方が受け入れられなければ、そのときは、今度こそ潔く辞表を出せばいい。それまでは、一度、書いた辞表をデスクの奥にしまっておこう。

村木専務の内示があつて半月後に、西沢は宣伝部の宣伝企画室長の椅子に坐つた。一月前の十月一日のことである。

前任の企画室長は営業部に配転になった。臨時の人事異動で、人事に手間どる東和醸造にしてはめずらしく、電光石火の早業^{はやわざ}だった。

企画室長は課長待遇である。同期入社の子の仲間のなかで、もっとも早い昇進であつた。西沢竜夫^{にしざわたつお}。三十五歳。

彼が室長に昇進すると、荒堀部長の態度は、手のひらをかえたように親切になった。昇進の背後に、村木専務の意向が働いていることを、素早く読み取つたのだろう。

一月間、何事もなくすんだ。その間、彼は前任の室長との事務引継ぎに忙殺された。事務引継ぎがようやく終り、いよいよ本腰を入れて、仕事に乗り出そうとしていたやさき、今朝、出社するとすぐ

に部長室に呼ばれ、いきなり、荒堀から、

「とんでもないことをいうようだが、極秘裡ごくひりに社長の娘を誘拐してくれんか」と、切り出されたのである。

奇怪な依頼だといふべきだった。資本金六十五億円の東和醸造の宣伝部長が、部下に命じる仕事としては、奇想天外な内容だとか、いいようがない。

荒堀から最初、その言葉をきいたとき、西沢はからかわれているとしかおもえず、まともに答へなかつた。悪質な冗談だと考えて、相手にならなかつたのである。タチの悪い冗談に、真面目まじめに返事する必要はない。

だが、西沢は、しだいに荒堀部長が本気であることに気づきはじめた……。

荒堀の人柄や性格を考え合せて、これまで部長がしゃべつた言葉が冗談ではないと悟つたとき、西沢は一瞬、身構えるような姿勢になつた。

西沢は顔をあげると、正面から荒堀の顔を見据みすえて、

「さつき、社長のお嬢さんを誘拐することは社命だと仰有いましたね。具体的にどういふことですか」

「引き受けてくれる氣になつたかね」

「さあ」

「どうしても、君に引き受けてもらわなければならぬのだ」

「断わつたとすれば……」

「そのときは、さつきもいったように社をやめてもらうしかない」

「かりに引き受けたとしたら——」

「当然、それに見合うだけの報酬ほうしゅうはあるはずだ」

「報酬？」

「具体的な報酬について、私の口からはなんともいえない」

「なぜ？」

「……………」

荒堀は不意に押し黙り、椅子を後へさげると、ゆっくり立ちあがって窓際にいき、西沢に背を向けた。

短い沈黙が落ちた。

荒堀は無言で窓外を眺めていたが、やがてふり向くと、

「これは村木専務の意向なのだ。君以外に、この仕事をできる男は、社うにはおらんという——」

「村木専務の？」

と、西沢は少しおびえたような声を出した。

2

荒堀部長は椅子の背に軽く片手をおくと、西沢の反応を点検するような目つきで眺めた。
西沢の胸の不安は増幅した。

へ村木専務の意向が働いているというが、その村木が、おれを一月前に企画室長に昇格させた。それは、今度の計画の布石だったのではないか？

畏おそれ、という単語が、ひょいと彼の頭の奥に滑り込んできた。おれに社命しゃめいによって、社長の娘を誘拐しろというが、一体、村木専務はなにを画策しているのか。

不安とは別に、一種の好奇心が内部に生れた。頭から断わるのではなく、その内容確かめてみた。
い。

「ぼくにどうしろ、というんですか」

「やっ、きく気になったかね」

「興味がありますね。私になにをさせるつもりなのか」

「うむ」

荒堀部長はうなずくと、

「ま、そこに坐れ」

と、部屋の中央に置かれた三点セットを指さした。

「失礼します」

西沢はソファに浅く腰を降ろした。

「脅かして悪かった」

荒堀は、西沢と対い合つた椅子に坐ると、唇の端に笑みを溜めながらいった。「社長の娘を誘拐するといつても、むろん君に犯罪を強制しているわけじゃない」

「というと？」

「誘拐といつても、偽装誘拐だ。つまり君は誘拐犯人の役を演じてもらえばいい」

「偽装誘拐？」

「そうだ」

荒堀は深くうなずいた。唇の端には、相変らず笑みを保っている。その笑みは、どこか嘲りの色を含んでいるように、西沢にはおもえた。

「用心することだ」

西沢はそう自分にいいきかせながら、荒堀の次の言葉を待った。荒堀がつづけた。

「社長というのは、もちろん古賀社長だ。誘拐するのは、古賀社長の一人娘の亜紀さんだ」

「社長の一人娘をなぜ？」

「あわてるな」

といったふうに、荒堀は目をあげて西沢をみつめると、テーブルの上の煙草入れから煙草を一本抜き出して口にくわえ、西沢にもすすめた。彼は手をふる断わり、上体をやや前傾させて、荒堀を見返した。

荒堀はライターを弾いて、煙草に火をつけた。そして、立ち昇る煙の行方を目で追いながら、

「君は知っているかどうか、村木専務は社長の信任が厚い。社長の家にもよく出入りして、家族ぐるみの交際をしている。その関係で、亜紀さんと個人的にも親しい。亜紀さんの相談相手にもなっている」

「それで？」

「ところが、亜紀さんには恋人ができた。亜紀さんは、去年までアメリカの大学に留学していたが、そのときにできた恋人らしい」

「結構なことじゃないですか」

「その恋人というのが、青い目の男性なのだ」

「アメリカ人ですか」

「ピーター・ベセルといって、ウィリアムズ大学を出て、ハーバードの大学院を経たインテリらしいが、社長は一人娘がピーター・ベセルと結婚したいといい出して、大変なショックを受けた」

「なるほど」

「社長は、ピーター・ベセルとの結婚を断乎許さんといっている。一方、亜紀さんのほうでは、どんなことがあってもピーターと結婚したいといっている」

「結婚させればいいじゃありませんか。いまの若い娘は、親のいう通りなんかにはなりませんよ、絶対に」

「それはそうだが、社長にしてみれば、目のなかに入れても痛くないほど可愛がつてきた娘なのだ。その娘が、こともあろうにアメリカの男性と一緒にになりたいといっている。簡単に許す気にはなれんだろう」

「それはそうでしょうがね」

と、西沢は冷淡な口調でいった。社長の心痛は理解できるが、それは、しよせん、家庭内のトラブルでしかない。一介の社員にはなんの関係もないことだ。

「そのうち、厄介なことが起った」

荒堀が煙草を灰皿に揉み消しながらいった。「亜紀さんが自殺をはかったのだ」

「自殺？」

そうだが、とうなずくと荒堀部長はテープの回転をわざと遅くしたような調子でしゃべりつづけた。

「睡眠薬を飲んで自殺をはかったらしい。幸い、早目にみつかつて命はとりとめたようだが、このままいくと、亜紀さんは本当に死ぬかもしれないと、村木専務は考えたらしい。とにかく彼女をピーター・ベセルという青年と一緒にしてやるしかないと専務はおもいはじめたのだ。しかし、社長のほうは頑として態度をかえようとしな。社長夫人、つまり亜紀さんの母親のほうは態度を軟化させたようだが、君も知るように社長はワンマンだ。会社でもそうだが、家庭でも専制君主として君臨してい